



第三部会 シニアと地域社会： 「ご近所ラボ」プロジェクト ～これまでの歩みと2019年度の取り組み～



(公財)ダイヤ高齢社会研究財団
澤岡詩野

「ご近所ラボ」プロジェクト :これまでの仕掛けとは違うポイント

意識すべきは「地域」ではなく「徒歩圏・自転車圏」

➔ 「最後まで残る範囲」が本当に意味のある地域

自助、ボランティアや地域貢献などと言われると重い

➔ 特に団塊世代以降の価値観は「マイペース」

➔ 支援する側と支援される側の境界線は「曖昧」がよい

ゼロよりも「ゆるやか」でもつながりがあれば上出来

➔ いきなり活動参加やグループ立ち上げは目指さない

➔ 埋もれた閉じこもり予備軍を「一歩」引き出すことがゴール

-今まで出てこない人は待っていても来ない

-これまでのような講座やサロンではなく、生活の中に
「一歩目」を仕掛ける

-地域や貢献は、本人が後から気が付けばよい

「ご近所ラボ」プロジェクト : 目指すモデル



ショッピングモール, 喫茶店,
ホームセンターなどで連続講座を
開催
見せかけは馴染みのお店が開催

住民

住民

住民

コーディネート

ゴールは地域デビュー
ではない

そこに目が向くこと!

▼ 終了後もつながれる
地元の仲間

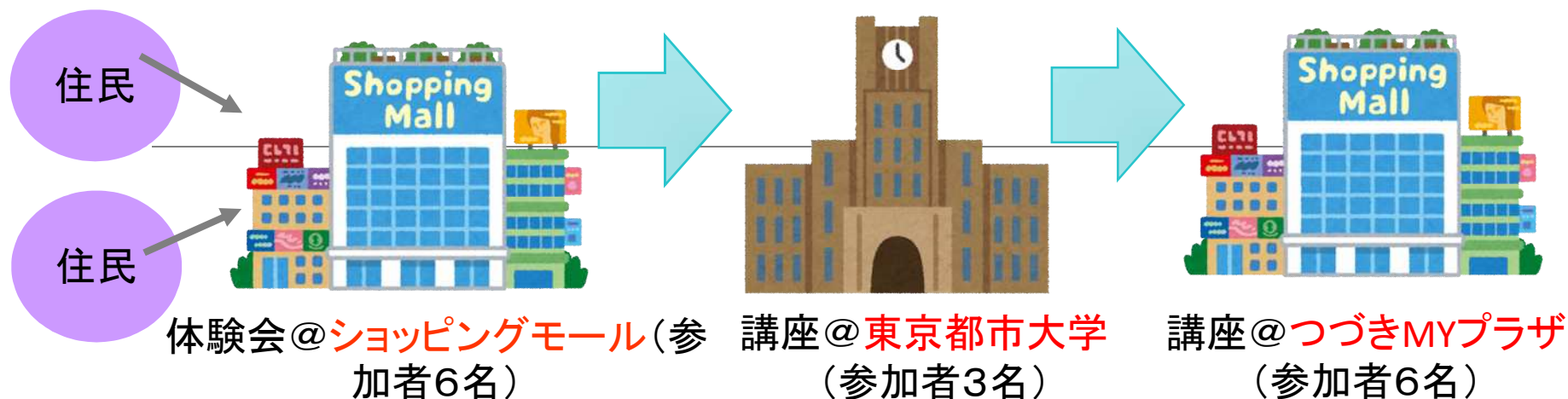
▼ 既存の講座への興味

▼ 講座主催団体で
ちよつとのお手伝い

コー
ディ
ネー
ト

講座の間に目指すのは
「小さな成功体験の積み重ね」
-外で何かを学ぶ楽しさ
-仲間がいる楽しさ
-人に自慢できる楽しさ
-地元の他の場を知る楽しさ

去年は永遠の電子工作少年，孫に自慢したいシニア男性に向け
「プログラミング講座」を実施（横浜市都筑区）



講座後3名が
ボランティアとしての
活動の継続を希望



交流会@シェアリーカフェ
（参加者4名）



講座@つづきMYプラザ
（参加者6名）※2回目

資金以上に「大きな問題」

その1 「役割とゴール」を明確にしないと巻込めない問題

- ➡地域のショッピングモールで、入口の講座を開催することを企画したが、負担感から途中で店舗側に断られた
- ➡同じ場所で連続講座を開催することを考えていたが、民間事業者にとってはそれも負担

その2 キーパーソンの「コーディネーター」を誰がやるか問題

- ➡中間支援組織に、講座時の活動への動機付けから終了後の活動フォローまでのコーディネートを期待したが、無償でマンパワーをそこにむけられる組織は少ない
- ➡活動する仲間を求める地域のシニアがメンターとして関わることで、つながりづくりや動機づけは可能

2019年度の「ご近所ラボ」の進捗

- キーワードは「スマートフォン」と「ウィンウィン」
スマートフォンなどを活用して、豊かなつながりのなかで歳を重ねるスマートシニアを増やす
- パートナー
 - 入り口となる民間企業
県と包括協定を結ぶ「Softbank」(年間800回以上もシニア向け講座を行っており、知名度と経験値からも最適)
➡ スマホを使うシニア層のすそ野を拡げることができる
 - フィールドとなる地域, 連携する自治体
生涯現役応援相談窓口などのシニアと地域について独自の事業を展開する「茅ヶ崎市」
➡ 地域に関わるシニアのすそ野を拡げられれば豊かな地域づくりや介護予防効果もみこめる

2019年度の「ご近所ラボ」の課題

■大きな課題

- 講座では「茅ヶ崎の地域資源」を使いこなす為の手段としてのスマホを裏テーマに
 - ➡地域に関心を向ける為に、どんな情報を盛り込むべきか？
- 今回は単発で、終了後に生涯現役応援窓口等が相談にのる
 - ➡連続であればプチ成功体験を重ねての相談であるが、単発の場合、どのような働きかけが現実的か？

-「プログラミング」「スマホ」
以外にどんなご近所
ラボが可能か？
(色々な組み合わせが
可能、大事なものは待って
いないでからめとる)

